

釧路湿原達古武沼のオオハクチョウ

杉 沢 拓 男

釧路湿原の東岸部には塘路湖、シラルトロ沼、達古武沼などの湿原湖沼群があり、渡り時期には多くの水鳥類が南下または北上する時期の中継地として知られている。しかし、釧路湿原のうち約5,000haがラムサール条約の指定湿地となっているものの、上記の3湖沼はその指定範囲には含まれていない。

この報告は、オオハクチョウの渡りの中継点としての達古武沼の意義を明らかにするために調査した結果をまとめたものである。なお、塘路湖ではオオハクチョウに給餌が行なわれており、シラルトロ沼ではたまに行なわれているが、達古武沼では給餌が行なわれておらず、人為的な誘因条件はない。

調査地・調査期間・調査方法

達古武沼は釧路湿原の東部にあり、太平洋沿岸から7~8km内陸に位置する周囲5kmほどの海跡湖である。沼は標高50~80mの丘陵にかこまれ、東西に細長い楕円形をしており、水深約2mである。沼の東部に達古武川が流入し、西部端から出た川は200mほどで釧路川に合流する。沼は大部分がキタヨシを主とする低層湿原に囲まれ、達古武川河口付近は湿原となって丘陵部にのびている。

調査期間は1986年10月6日（初認）から1987年4月24日（終認）までで、この間1週間に1~2回調査した。ただし、沼が完全に結氷した12月25日~2月28日は10~15日に1回の調査である。調査時刻は、7:30~10:30または15:00~17:00のいずれかであった。

各調査では成鳥と幼鳥の数を記録するとともに、利用場所、結氷、開水面との関係なども調べた。カウントには20倍望遠鏡をもちいた。

このほか、4月下旬に調査地から約5km北にある塘路湖の湖尻でも同じような観察を行なった。

表1 南下時におけるオオハクチョウの数

結 果	カウント日	全体数	幼 鳥	幼鳥の比率	結氷率
1. 10~12月の飛来状況	10月6日	5	0	0	
1986年秋における初飛来は、10月6日で成鳥5羽であった。しかし、これらはすぐ飛去し、10月下旬までオオハクチョウは観察されなかった。その後10月22日に25羽が飛来してから飛来が本格化し、数が増加した。12月初旬には98羽（うち幼鳥32羽）の最大数を数えた。結氷面積が沼の95%くらいになるまでは80羽近くがいるが、ほぼ全面結氷した12月14日には一挙に飛去し、それ以後は10羽以下となった。この間のオオハクチョウの生息数を表1に示す。	20日	25	7	28%	
	22日	24	5	20.8	
	24日	25	9	36.	
	26日	30	9	30	
	11月1日	46	13	28%	
	5日	42	15	35.7	
	12日	57	17	29.8	
	20日	72	29	40	97%
	22日	67	25	37	90
	28日	84	28	33	95
	12月6日	98	32	32.6%	95%
	7日	81	30	37	95
	14日	10	5	50%	79%
	15日	6	1		99
20日	8	3		99	

生息数の多かった10月20日～12月7日における幼鳥の比率は平均33.6%であった。この間、11月12日までを前半、それ以後を後半として幼鳥の比率をみると、前半では30%、後半では36%で、後半でやや高かった。

オオハクチョウの飛来が本格化した10月20日から一挙に飛去した12月14日までの期間は49日であった。

なお、12月下旬から1、2月には沼が完全に全面結氷し、湿原内の不凍河川などで越冬しているオオハクチョウ4～5羽が結氷している沼に飛来する程度であった。

2. 3～4月の飛来状況

春にオオハクチョウが沼に姿を現わしたのは3月3日であったが、数は6～10羽と少なかった。数が増加しはじめたのは開水面が5%となった3月17日以後であった。沼の開水面が広がると同時に飛来数が増加し、3月28日には130羽と、春の渡り時期における最大数となった。それから4月20日に一挙に飛去するまで、生息数は60～100羽であった。この間のオオハクチョウの生息数を表2に示す。

(4月24日にはコブハクチョウ2羽が観察されたが、これはその後シラルトロ湖に移動した。またオオハクチョウは塘路湖では5月2日に46羽が数えられた。)

この間の幼鳥の比率は平均13.5%で、秋の南下時に比べて低かった。またこの間、4月4日までを前半、それ以後を後半として幼鳥の比率をみると、前半では12.3%、後半では15%であった。なお塘路湖湖尻で幼鳥は4月20日に111羽中16羽、22日には158羽中21羽で、割合はそれぞれ14.4%、13%であった。

3月3日に飛来してから一挙に飛去した4月20日までの滞在期間は39日であった。

3. オオハクチョウの沼の利用状況

オオハクチョウが沼で利用している部分は、11～12月には90%以上が釧路川への出口となっている西岸(図1の斜線部C)であったが、前半の10月下旬には達古武川が流入するB地区の利用も多かった。これらの部分はいずれも結氷が遅く、マコモの密度の高いところであった。3～4月には利用部分は秋より広くなり、東部の達古武川沿い(図1の斜線部A)や達古武川が流入する河口付近と北東岸、西岸の一部であった(図1の斜線部A, B, C, D)。このうちA地区は沼から500mほど東の湿原である。ここは湿原に面した畜産会社(ブタ, ウシ)の汚水が流入する場所で、飼料の残さや糞尿が流入し、一部キタヨシ群落にその影響が見られる。オオハクチョウが利用する沼の部分は、結氷や開水面の状況によって変化し、開水面の少ない3月上旬にはC地区に集中し、3月中旬に開水面が広くなるとともにB,

表2 北上時におけるオオハクチョウの数

カウント日	全体数	幼鳥	幼鳥の比率	開氷率
3月3日	8	3		3%
7日	6	2		3
9日	10	3		3
10日	10	3		3
17日	62	10	16%	5%
20日	45	5	11.1	5
27日	121	10	8.2	10
28日	130	8	6.1	10
30日	40	7	17.5	10
4月1日	84	14	16.6%	15%
4日	101	11	10.8	15
7日	81	9	11.1	15
9日	60	7	11.6	15
11日	61	10	16.3	15
14日	66	6	9.0	20
15日	75	12	16.0	20
16日	100	13	13.0	25
18日	107	26	24.2	50
20日	86	16	18.6	80
22日	0	0		100

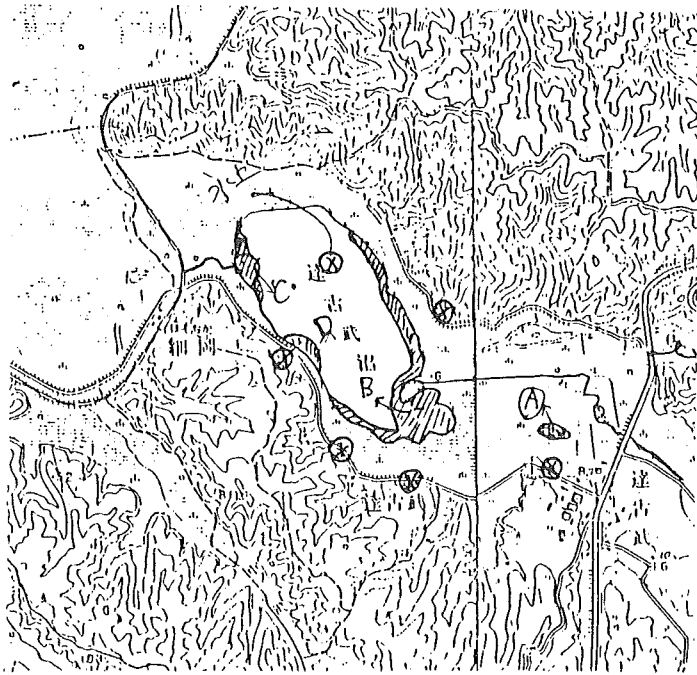


図1 調査地。⊗：観察地点
斜線部はオオハクチョウが主に利用した部分

C, D地区を利用してはいた。また沼の開水面が少ないときにはA地区が利用されたが、それも3月下旬の10日間だけで、沼の開水面が広がるとともに利用されなくなった。

4. そのほかの鳥類

調査期間中、達古武沼ではオオハクチョウ以外にヒシクイ、キンクロハジロ、ホシハジロ、アイサ類など多数の水鳥が飛来し、オオワシ、オジロワシも観察された。またタンチョウは1987年には3月5日に飛来し、4月上旬には営巣した。

考 察

達古武沼における観察は、1987年秋から1987年春にかけての1シーズンであったが、オオハクチョウが飛来する期間は、南下時には48日間、北上時には34日間で、最大飛来数は南下時に98羽、北上時に130羽であり、この沼がほかの湖沼と同じように渡りの中継点となっていることを明らかにできた。この間、沼での飛来・滞在状況をみると、南下時には徐々に飛来し、沼の結氷により一挙に飛去し、

北上時より滞在期間が長かったが数は少なかった。北上時には一挙に飛来し一挙に飛去した。この要因として考えられるのは、南下時の飛去は沼の結氷により水面がなくなったことである。北上時には強い南風が吹いた翌日に飛去したことがあげられる。このように、オオハクチョウによる沼の利用状況は開

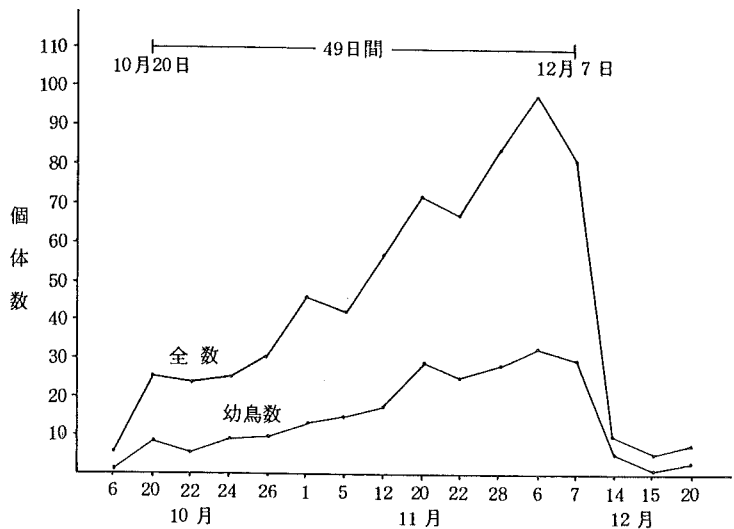


図2 南下時におけるオオハクチョウの数の変化

水面の状況により、5%程度でもわずかに開水面があれば飛来する。

幼鳥の占める割合は、南下時には平均33.6%であったものが、北上時には13.5%に減少していた。この減少は冬期間の死亡によると考えられるが、幼鳥を伴った家族の北上コースが違うことも考えられる。幼鳥の割合が減少していることが明らかになった段階で、塘路湖でも同様の調査を行なったところ、幼鳥の割合は達古武沼における値と同じであった。

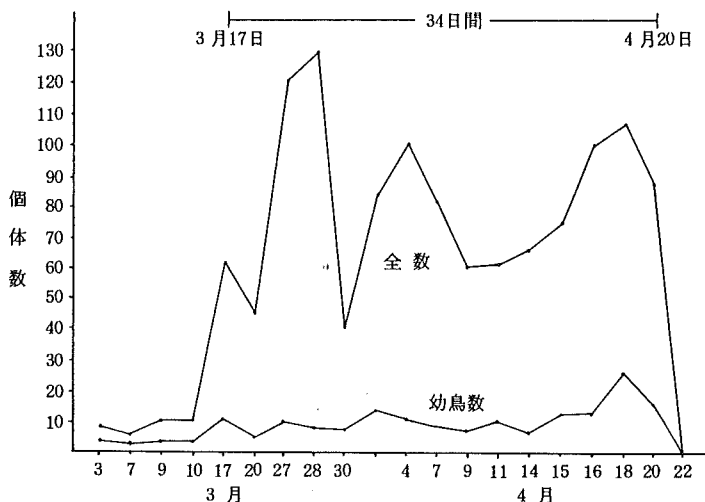


図3 北上時におけるオオハクチョウの数の変化

達古武沼はオオハクチョウ以外の水鳥の生息地ともなっており、またタンチョウも繁殖していて、釧路湿原のなかでも優れた自然環境をもつ地域である。しかし、ここ数年、周辺の開発による影響が目立ち、国立公園化によって開発と利用による影響も拡大する可能性も考えられる。例えば、冬期間にワカサギ釣り、スノーモービル、モーターハングライダー、夏にはウインドサーフィン、カヌー、ゴムボートなどの利用が見られ、これらは最近では次第に盛んになってきている。これまでも氷上から人がオオハクチョウに異常に接近する、オオハクチョウが集結している開水面に向かって岸からルアーの釣り糸を投入する、氷上でのスノーモービルでの走行、ウインドサーフィンによるタンチョウの幼鳥がいる水面への接近、ワカサギ釣りの人についてきたイヌがオオハクチョウの群れを攻撃するなどが目撃されている。このほかワカサギ釣りの釣り客が捨てる釣糸、針、空カンなどが水鳥に悪影響を及ぼすことも考えられる。

達古武沼は優れた自然環境をもち、野生動物と人間との接点となるよい地域である。そのため、現在のように沼のレジャー利用が、野生動物の保護の視点がないまま盛んになることについてはなんらかの対策を検討する必要があるであろう。

要 約

- 1) 達古武沼のオオハクチョウの利用期間（10羽以上が飛来してから飛去まで）は、南下時（1986）には10月20日～12月20日の48日間、北上時（1987）には3月17日～4月20日の34日間であった。
- 2) 最大飛来数と平均飛来数は南下時には98羽（12月6日）と54羽、北上時には130羽（3月28日）と81羽であった。
- 3) 幼鳥の占める割合は平均すると、南下時には33.6%、北上時には13.5%であった。
- 4) 沼に開水面が5～10%あると、80前後が飛来する。

5) 沼でオオハクチョウが主に利用する部分は、結氷が遅いかまたは開水面がはやくできる湖尻と達古武川流入口付近である。

